
特殊科のARM使い

銀水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特殊科のARM使い

【Nコード】

N8366L

【作者名】

銀水晶

【あらすじ】

結城深紅はトラックにひかれ神によってファンタジーな世界に転生した。その世界の学園で繰り広げられるARM使いとなった深紅の物語。

プロローグ（前書き）

ゼロ魔のほうも途中なのに懲りずに投稿してしまいました。
どうか温かく見守ってください。

感想の方も大歓迎です！！

プロローグ

「キヤー！やっぱりTOAのシンクそっくりー！！いやーあんたを連れてきてよかったわー！」

「ね…姉さんもうちよっと静かにしようよ」

僕は結城深紅、ただの中学生だ。

そして隣で騒いでいるのが僕の姉である結城亜里沙だ。

学校が終わり家に帰った途端、姉に無理やりイベントに付き合わされた。しかもTOAの烈風のシンクのコスプレでだ。

僕の顔はかなり女顔だ。しかも性格の所為かかなり生意気な雰囲気が出てしまっていてそこにオタクである姉に目を付けられたということだ。名前も一緒だしね。

しかし…染料剤がかなり気持ち悪いな…早く帰ってお風呂に入りたい…

しかし現実残酷でまだイベントが始まったばかり、これからばかりかい会場を一回りして姉の販売スペースにもどり接客だ。

「ちよっ！！何この子！すごくかわいいー！！」

「へえ〜TOAのシンクの格好なんだー！すごい似合ってるよー！！」

「本物よりもすこし女顔だけど…そこがまたいいわね!!」

「これかかなり受けの確立が…はあはあ」

「すみません…全然付いていけない…」

「もう帰りたいな…はあ」

やっと終わったころにはもう空が真つ暗になった頃だった。姉と二人人気が少なくなった道を進む。

「今日はありがとねーお礼は後で何かおごるからさー!!」

僕のおかげか商品が完売出来た姉はかなりほくほくと笑顔だ。

「じゃあ駅前のカフェの新作パフェ1つで頼むよ(にっこり)」

「わ…わかったわ／＼(かわいい!!)でもほんと甘いもの好きよねえ…男の子なのに…」

「む…甘い物好きに性別は関係ないと思うけどな」

「まあそれはお姉さん危ない!!??」深紅っ!!」

ドンっ！！！！！

キキっ！！！！！！

突然明らかにスピード出しすぎなトラックが後ろから走ってきて姉さんがひかれそうになったのでとっさにかばった。

当然僕はかなり重症で倒れている僕の一面に血がおびただしく広がっている。

「深紅っ！！しっかりしなさいよ！！死んじやいやだからねっ！！」

「ね…さん…ぶ…じ…でよか…た…」

「ちよ…深紅っ！！！！深紅う！！！！」

姉さんの悲痛な叫びを聞きながら僕の意識は真っ暗になった。

プロローグ（後書き）

メル ヴンはマイナーですかね？
私は結構好きだったんですが…

プロローグ2

「……ここは一体どこなんだ」

気づいたらどこも真っ白な空間に僕はいた。

ふと自分の身体が気になって手を見ってみると透けていた。

「……僕は死んだのか」

「そうじゃのう、予定外なことにな」

「だれだっ!!」

突然後ろから声があったので振り返ってみると真っ白な長いひげのじいさんがいた。

「わしは神じゃ」

「そうか」

「…いやそこは驚くとこじゃないのかい?」

「…正直いうとかなり驚いているよ。でも驚きすぎて脳が働いていないというか…」

「なるほどなの…」

「さて、では本題じゃがお主は本来あの場で死ぬ運命ではなかった。本来ならばお主じゃなくて姉である亜里沙が死ぬ予定じゃったのじやよ」

「…そうなのか」

「……後悔しているのかの？」

「いや…むしろ良かったと思っている。姉さんには結婚を予定している相手もいたしな…幸せになってほしい」

「だからって自分を犠牲にすることはないじゃろっに」

「僕はいいんだよ」

「ふむ…では話を続けるが本来ならば全ての生物は己の運命に逆らわず生涯を終えるのじゃ。しかしお主は無意識のうちにその運命を打ち破った。そのような人間はめずらしいからの。そのまま死なすには惜しいとおもったのじゃ。」

「はあ…」

「そこでじゃ！お主転生というものを体験してみないか？」

「転生というとよく漫画なんかの世界にいくやつ？いま小説とかではやっっている」

「まあそんな感じじゃな。しかし漫画やゲームの世界に行くことは無理じゃ。いわゆるオリジナルの世界じゃな、なにか希望はあるかの？」

「別にいいよ。あまり漫画とか見ないし。希望か…：そうだな…：じゃあ魔法が存在する世界で！」

「了解じゃ。後3つまでなら能力を追加できるがどうするか」

「んーじゃあ能力はこんなかんじかな」

- 1、すべてのステータスを鍛錬次第で無限に伸ばせるようにする。
- 2、メル ヴンのARMを製造出来るようにする。
- 3、ハガレンの錬金術が出来るようにする。

実は僕、アクセサリー造りが趣味なんだよね。将来アクセサリー屋さんになるのもいいかもと思ったほどだ。

そんな僕にとってメル ヴンのこの能力は絶対ほしい能力だ。

錬金術のほうは材料探しをするのに便利な能力かもと思ったからだ。

「ふむ…：了解じゃ。しかしそのような設定だとその世界の魔法が使えなくなるが良いのかの？」

「む…：そうなのか。惜しい気もするけど良いよ」

「あいわかった！ついでにダークネスARMの副作用とガーディアンARMを使用すると動けなくなるといふようなネックな部分を取り除いたぞい。さらに二つまでなら同時使用も出来るようにしたから」

「えらく親切だね。ありがとう」

「容姿は…ええい面倒じゃ！…TOAのシンクでいいじゃろ！…」

「ええっ！？そんな適当な！…」

この格好は軽くトラウマものなんだけど…！

「おまけにシンクの技が使えるようにしといたからな。さすがに譜術は無理じゃ。世界を構成するものが違うからの」

「やけにおまけが多いですね…」

「これもサービスじゃ」

「さいですか」

「おっと、もう時間のようじゃな。それじゃあ第二の人生を楽しんでくるのじゃ！…」

神のじいさんはそう言つと両手を大きく掲げた。

そして僕の足元に大きな穴が表れ、僕は落つこちた。

「もうちょっと違う送り方があるだろー！！??」

主人公設定

人物設定

転生前

名前：結城 深紅（ゆうき しんく）

性別：男

年齢：15歳

性格：普段はめんどくさがりだが興味があることにはかなりのめりこむ

外見：セミロングの黒髪を一つに縛っている。（切ろうとしたのだが姉が許さないので断念） かなりの女顔

転生後（入学時）

シンク・ルナシオン

性別：男

年齢：15歳

所属：アシュベイン学院特殊科1年

性格：転生前と変りなし

外見：TOAのシンクにそっくり

体質：超幸運体質

特殊能力：錬金術、ARMを造れる能力

第1話 入学前編1 ARM造り

僕が生まれた世界の名はレバリアース。僕が希望した通り魔法のあるファンタジーな世界だ。

三大陸の一つ、ルクティア大陸はこの世界最大の大陸。

商業都市アルマークはルクティア大陸の北に位置している。

アルマークの外れに広大な土地を所有する大商人一家ルクシオン家の三男として僕は生まれた。

結城深紅がシンク・ルクシオンとして転生して早5年。

生まれたときから意識は完全にあっただのでおしめの時間などはかなり屈辱的だったがもう過去のことなので忘れることにした。

5歳位になると敷地内（かなり広大）も自由に動けるようになるのでさっそくARM作りをする場所を探す。部屋ですると誰かが入ってくる可能性もあるからだ。

敷地内を詮索すること早30分、あまりにも広すぎてきりがなし…
このままだと一日はかるく越しちゃうよ…（汗）

でもその甲斐あってARM作りに最適な場所を見つけた。敷地内の森の奥にあった洞窟だ。調べてみたところクマなどの生き物が住んでいる形跡もなかった。

驚いたことにこの洞窟は奥に進むと広い空間に繋がっていた。そこには地下水の川が流れていて様々な鉱石が生えていた。

神秘的なところだな…うん！気に入った！ここで作業しよう！！

場所も決まったとこだし作業を開始することにした。

まず材料だけど水は洞窟の川があるので問題なし。火力はたいまつとかをたくさん持ってきたので洞窟で焚き木をして火を起こそうと思う。

そして鉱石だけど、そこで神からもらった錬金術を試してみた。とりあえず某豆のまねをして両手をパンでやってみたら成功した。

洞窟内に生えている鉱石を元に様々な宝石やら金属やらを錬金する。黙々と錬成しているうちにいつの間にか僕の周りに錬成したものが大量に溢れていた。

次はいよいよARM作りだ。とりあえず原作にあったARMを一通り作ってみようと思う。

作業中（あまりにも文才がないので製造中のことはカットさせていただきます。大変申し訳ございません。）

結論をいおう。原作にあったARM一部を除いて一通り作ってしまった。おまけにマジックストーンも色んな種類を大量に作った。

作るのにも魔力がいるから魔力切れになるかと心配だったが問題なかった。僕は5歳にして数十個のARMを造っても余裕でびんぴんしているほど魔力が高かったのだ。

神よ…能力の設定間違ってないかい？と思ったこともあったが、どうやら間違ってはいなかったようだ。

というのも、

一つ目のARMを造ったときに魔力が1レベルアップ

二つ目のARMを造ったときに魔力が1レベルアップ e t a

というように一つARMを造るごとに魔力レベルが上がっていくのだ。

なんか反則しているような…日々魔力を上げようとしている魔法使いさん達に失礼だよなこれ…

そういうわけで僕の今の魔力レベルは80位だ。

今日はARMを造っただけで満足したのでとりあえずディメイションARM『ジッパー』を二個発動させてそれぞれARMと材料を収納させた。

洞窟から外へ戻ってみるとどこからか声が聞こえた。

「シンク様どこにいらっしやいますか？」

「もうお空が暗いですよ早く戻ってください!!」

やばっ!?!? とういえばメイド達にもなにも知らせず抜け出して来ちゃったんだっ!?!?

その後、両親や使用人たちからさんざん説教をされて長い一日が終わった…あつ。

第2話 入学前編2 畑修行でいらぬ称号

あの後も何度か使用人の目を盗んで洞窟に行つてディメイションARM「修練の門」で色んなARMを使つてめきめきとシックスセンスを鍛えている。

話は変わるがメル ヴンに出てくるジャックが使うARM「バトルスコップ」をどう思っているだろうか。

一言で言つと地味だと大抵の人は思うだろう。

しかし僕はそうは思わない。

何故なら畑を耕しながら体力や「シックスセンス」を磨くことが出来るからだ！まさに一石二鳥！！

というわけで今回は「バトルスコップ」を使つて鍛えることにした。

しかし真つ先に問題に直面した。

土地が無いと出来ないよねこれ……

しかたなく父にお願いしてみた。

「父上、実は欲しいものがあるのですが……」

「ほう、普段からなにも欲しがらないシンクがめずらしいな。なんだ？言ってみる」

「土地です」

「ブっ!？」

父が吹いた。

まあ当然だな。なんせ五歳児が土地を欲しがるんだから。

結果として父は驚いたものの珍しく僕が欲しがったものなのだからと嬉々として土地をくれた。誰も住んでいない土地だから好きにしたいという許可も頂いた。

しかし……かなり広いな……

貰った土地は我が一族が管理している土地の一部だ。

しかし、かなり広い。およそ東京ドームが10台位は軽く入る。

周りは家など何もなくてただ平野が続いているだけだった。

とりあえず畑にする大まかな場所を決め、肥料を錬成しばらまく。

「ウエポンARM！！バトルスコップ！！」

バトルスコップに地属性のマジックストーンをはめる。そうすることによって大地を操れるようになり、作業が効率化する。

そしてバトルスコップに同調するように魔力を高め、後はひたすら掘るべし掘るべし！

そして最後に適当に錬成して作った種数種類をばらまき

「育て！アースビーンズ！！」

技を発動させる。

ニヨキニヨキ……

ニヨキニヨキニヨキ……

種はあっという間に育ち、そこらへんの山より高い蔓の樹海になってしまった。

ポカーン(。o。)

やりすぎてしまった……(汗)

しかし所々見てみると色々な果実が実っていた。適当に錬成した種だったので見たことのないものも数多くあるようだ。

しかたないので少しずつ詮索してみることにし、プチ放置することにした。

この年、ルクティア大陸の南に位置する首都ベルセルク付近は大変な干ばつに襲われ、食糧不足に襲われた。

ベルセルクの国王ベルセルク12世はこのことに危機感を覚え、ルクティア大陸全体に支援を求めた。

しかしどの国もしぶっていかかなり困難を極めるようだ。

ベルセルクほどではないが、どの国も同じように水不足等に陥っているからだ。

「そこで我々ルクシオン家にも支援の要請がかかったのだ。」

ルクシオン家は食物の貿易にも深く関わっている。それでこの要請を受けたのだろう。

兄「しかし父上あてはあるんですか？当然支援となるからには利益はあてにならないですし」

父「問題はそこなのだ。ルクシオン家は代々続く商人の家系、水不足の影響で作物が減っている中無利益で支援を行っていいものか」

「……あの、僕に提案があるのですが……」

父「なんだ、言ってみろ」

「はい、僕の土地になっている果実を送るのはどうでしょうか？」

父「……ああ、あの蔓の森のか…あの時はいきなりあの一帯に生

えてきたのでなにながあつたのかと思つたよ…」

父は遠い目している。

それはそうだろう。あの後、いきなり生えてきた蔓の森はなんなのか周囲から質問が絶えなかつたみたいだ。

結局、その問題は息子である僕が新しい植物の実験をしているという説明で落ち着いた。

まあ間違つてはいないな。

「はい。あの後少しずつ調べてみたのですが一部の不明なものを除いて普段食べている果実が多種実っているようです。それと一定の範囲の果実を取って経過を見た所、一週間で実り変わりました。一時的なものなので今から今回だけ無償で支援しても良いかと。王家に恩を売っておくのも悪くないと思います。」

周りは水不足で乾いている感じなのに蔓の森はかなりしっとりしている。

しかしじめつという感じではなくてマイナスイオンが沢山出ていてとても心地よい感じだ。

原因は蔓が日照りを抑えてくれるのと、何故か蔓の森を生やす

ときに出来ていた新しい泉だ。

たぶん土地を改造しているときに地下水とかが見つかり、いつの間にか蔓の中を通して溜まっていたのだろう。

「お前が言うのだからそうなのだろう。よし！この件はお前に任せる！頼むぞ！」

「はい。父上。」

それから大忙しで蔓の森に実っている果実を採取し大量に首都に送った。

数カ月後

「どろどろしていつなった…」

僕は今ベルセルクの城で正装に身を包み受章式を受けています。

名目は沢山の果実を無償で寄付し、沢山の国民の飢餓を防いだということだ。

………そんなのいらねえー！！

番外編 今更ですが（前書き）

すいません

2 作品共にプチ放置してました。

書きたいネタはいっぱいあるのに文章が追いつかない（泣）
だれか代筆してくれないかな…

たぶんこれかれも不定期更新になるかなと思います。

番外編 今更ですが

ローゼンの称号…

それはルクティア大陸にて皆に認められた者だけが持つと言われている称号。

認められると言っても人それぞれ違う。

戦争で名誉ある戦を勝ち取ったとか民に多くの献上をしたとか。

僕の場合は後者である。

…とまあそれはおいといて

今日は僕の兄弟を軽く説明しようかと思っている!!!(称号関係無
っ!?)

今僕は父の言い付けで魔法の練習をしている。

ARM能力の関係上こっちの魔法の才能がからつきし無いのは分かっているので正確には魔法の練習のフリだが。

実際には今度はどんなARM作ろうかな…とか考えていたりする。

あ、言い忘れていたけど今僕は10歳です。結構飛ばしました。

「なにをしているかと思えば…またお前か…何度やっても無駄だつてことわかんないかな。

バカはなにやっても所詮バカなのにな…いい加減目ざわりなだけで」

ああ…またウザイのがきたな…

僕に話しかけてきたウザイ奴は僕の1歳年上の兄でルクシオン家の二男にあたる。

名前はイスラ・ルクシオン

母親ゆずりの真っ赤な長い髪にきつい切れ目な美形（美人？）さん

だ。

すごい女顔でぶっちゃけ前世の僕そっくりだ。まあ僕はそんなにツンツンしてないけど

そんな二男であるイスラは三男の僕をかなり嫌っている。

前々からそうだったのだが僕がローゼンの称号を貰った時から態度がさらにあからさまになりしまいには殺気まで送られてくる始末だ。

どうしてそうなったのか理由を考えたのだが二つ覚えがある。

一つは才能だ。

イスラは生まれたときから魔法の才能が抜き出ている。

そのためイスラはかなりプライドが高く、魔法が使えることを誇りに思っているが、魔法を使えない人にはかなり見下している所がある。

対する僕は魔法に関しては落ちこぼれ

それなのに自分を差し置いて勝手に称号を手に入れてしまう僕にイライラ…って感じかな

もう一つの理由は…

「なーにしてるんだイスラ！シンクは集中しているんだから横やりをいれてはだめだろう！」

「兄さん／＼／＼」

こいつだ…

アレク・ルクシオン

ルクシオン家の長男で13歳で僕よりも3歳年上だ。

僕と同じ父親譲りの緑色の短髪にさわやかな笑顔が素敵な美形だ。

小さい頃から身体を鍛えていて13歳とは思えないほど体格もがっちりし始めている。

性格もさわやかで面倒見がいい兄貴肌なのだ。

そんな兄は首都ベルセルクの外れにあるアルトリア学園に今年から中等部に戦士科として入学している。

基本入学すると生徒は学園専門の寮で生活することになっているのだが、今は夏休みなので自宅に帰っているのだ。

そして先ほどのイスラ兄の反応…まさに恋する乙女の顔！

顔も雰囲気も桃色に染まっちゃって…普段の顔の見る影もないね

BL！BLなのか！？…いや…別に偏見とかはないけどね…恋愛は自由だよん。

しかしアレク兄はイスラ兄からくるラブラブ視線には一切気付かない鈍感さんだ。

しかも歳が離れている僕のことを何かと面倒見てくれる。子供扱いだけ

でもそれがイスラ兄には気に食わないらしくてさらに僕に対する態度は悪化する

現に今もそう。僕がアレク兄に頭を撫でられているだけでイスラ兄は機嫌ががらっと悪くなった。

怖っ！？夜叉！顔が夜叉になってるよイスラ兄！！

正直面倒なことはご免なのでアレク兄には僕じゃなくイスラ兄を優先して可愛がってほしいのだ。

アレク兄としては末っ子の僕が少し生意気でも可愛いくてしょうがないんだろっけど、僕精神年齢アレク兄より遥かに高いからね。うれしくないよ

とまあ紹介はこんな感じってことで強制終了！！

番外編 今更ですが（後書き）

しまった！親の設定がまだだった！？……まあいいか。モブ中のモブだし！

BLもカテゴリーに入れようかと思いましたがどしませんでした。たぶんこれだけだと思うので。

…： しかない短いな（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8366/>

特殊科のARM使い

2010年11月11日12時00分発行